

Die schulische Erziehung der jüdischen Flüchtlingskinder in Shanghai

阿部, 吉雄
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5616>

出版情報 : 言語文化論究. 21, pp.31-38, 2006-03-16. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



上海のユダヤ人難民子弟への学校教育

阿 部 吉 雄

ナチスドイツによるユダヤ人迫害を逃れ、1938～1941年にドイツ、オーストリア、チェコスロバキア、ポーランド等から中国の上海租界へ約1万8000人のユダヤ人が移住した。1941年12月の日米開戦前にアメリカその他の国々に再移住できた少数を除けば、ほとんどの人々は1945年の終戦ないし1949年の中華人民共和国の成立までの約5～10年間上海に留まることになった。極東に突然出現したこのユダヤ人難民社会は、上海在留のユダヤ人社会や欧米のユダヤ人組織による救援委員会と協力して多くの課題を克服しなければならなかったが、そのひとつが教育問題だった。小論では13歳までの年少者の基礎教育を扱い、14歳以上の青少年教育および成人教育については別の機会に論じたい。

上海のユダヤ人難民社会が行った教育活動には通常の難民社会の場合と比べて以下のような特徴があった。

1. 上海のユダヤ人の自助努力による。

学校の設立・運営はユダヤ人難民および上海在住のユダヤ人が行った。学校があった共同租界の行政機関である市参事会 (Shanghai Municipal Council) からの援助はなかった。¹⁾ 太平洋戦争中、英国籍を持つ裕福なセファルディ系ユダヤ人たちが日本により敵性外国人として抑留され資金が枯渇した時には、海外のユダヤ人組織から資金援助を受けた。難民たちは出身国で学校教育を経験し、中には移住前に教師だった者もあり、彼らには教育に必要な知識と経験があった。

上海在住のユダヤ人社会にとって難民の子弟への教育は、宗教的同胞への連帯という意味の他に、46ヵ国からの外国人が住む上海租界におけるユダヤ人全体の地位を維持するためでもあった。セファルディ系の大富豪であり、救援組織のヨーロッパ系ユダヤ人難民支援委員会 (Committee for the Assistance of European Jewish Refugees / CFA) の教育・文化委員会の責任者だったSir Horace Kadoorieは1940年に「ユダヤ人社会への評価やユダヤ人一般に対する他民族の意見は我々の子供たちにかかっている。このことを認識するならば、我々ユダヤ人の青少年に人生への良いスタートを切らせ、ユダヤ人であることに付随する責任を教えることが我々の義務であることは明らかである。」と述べている。²⁾

2. 上海のユダヤ人難民社会では子供の比率が小さい。

上海のユダヤ人難民は男性が約3分の2を占めていた。フランス在住のユダヤ人青年によるドイツ外交官殺害に端を発する全国的反ユダヤ人暴動である水晶の夜事件 (1938年11月9日) の際、ナチスドイツは働き盛りのユダヤ人男性約3万人を逮捕し、強制収容所に送った。彼らが釈放される条件はドイツを出国することだったが、当時世界の国々はユダヤ人の大量流入を警戒して移

住を厳しく制限しており、唯一ビザなしで移住可能な上海租界にしても旅費は高かった。そのため多くのユダヤ人男性は家族を残してとりあえず単身移住する道を選ばざるをえなかった。強制収容所への収監を免れた人々も社会的経済的に迫害を受け、国外への移住を迫られていたが、ユダヤ人組織の援助を得た人々以外は、ある程度の資産を有する中年以上の人々を中心だった。そのため16歳以下³⁾の学齢期の子供は難民全体の約10%に留まった。

3. 就学率が高い。

成人でさえ職につくことが難しかった当時の状況では、子供たちを働かせることは現実的ではなかった。また学校にいる間は、子供たちを難民の悲惨で単調な日常生活から隔離することができた。多くの子供たちは放課後もスポーツ・宗教・趣味などの活動のため、学校に留まった。

親たちもかつて学校教育を受けており、教育の重要性の認識は難民社会において無条件に存在していた。そもそもユダヤ人社会には教育を重視する伝統がある。⁴⁾ それゆえ、上海の貧しい中国人労働者用に作られた住宅（里弄）の各部屋に1家族の難民が住み、ハイムと呼ばれた5つの難民キャンプでは約2500人が2段ベッドを並べた大部屋に詰め込まれるという劣悪な居住環境であったにもかかわらず、子供たちが通った小学校は近代的な建物で窓も大きく、広々とした運動場を備えていた。太平洋戦争中に救援資金が枯渇し、ハイムの住人には1日1350カロリーという生存限界ぎりぎりの食事しか供せられなかった時にも⁵⁾、学校は閉鎖されず、生徒たちには牛乳と昼食が無料で与えられた。これは子供たちの栄養を確保するとともに、修学意欲を高める効果があった。

4. (比較的) 安全な環境である。

上海のユダヤ人難民は衣食住すべてにおいて故国と比較にならない劣悪な環境に置かれたが、当初戦争や迫害の危険はなかった。食事と安全と家族があれば子供には十分であり、成人の難民が耐え難いと感じた環境も、子供たちにとっては異文化との出会いに満ちた遊園地のような場所だった。

難民たちが上海にいた1938年末～1949年のうち、上海が戦時下であったのは1941年12月～1945年8月の太平洋戦争の時期である。1943年2月の上海地区日本陸海軍司令官名で出された布告により、「ドイツ（旧オーストリア、チェコスロバキアを含む）、ハンガリー、旧ポーランド、ラトビア、リトアニア、エストニア等から1937年以降に上海に到着した無国籍難民」の居住・就業が虹口東部・楊樹浦西部の約2平方キロメートルの地域に限定された。（「無国籍難民」は実質的にユダヤ人難民を指す。）難民たちが「ユダヤ人ゲットー」と呼んだこの地区への居住・就業制限は1943年5月から実施され、日本が敗戦する1945年8月までの2年3ヶ月間続いた。そのうち難民への管理が厳しかったのは前半の1年間であり、日本の敗色が濃くなった1944年以降は難民に構っている余裕もなくなった。むしろ米軍機による上海爆撃で死傷する危険の方が大きな問題になった。

日本人兵士や官吏もユダヤ人難民の子供には概して優しく、その教育には理解を示した。例えば上海無国籍避難民処理事務所の職員合屋はゲットー地区からの外出許可証の発行を申請する難民たちに対し、しばしば暴力的に振舞ったと伝えられるが、難民の子供たちとの会話を好み、ゲットー地区外にある学校へ通学するための外出許可証は無条件で発行した。

5. 年齢ごとに異なるレベルの教育。

続々と到着する難民の子弟の教育には時間的猶予が許されなかった。子供たちは移住の直前までヨーロッパの学校に通っており、移住のせいで中断された教育を上海で再開する必要があった。当然、年齢に応じた対応をしなければならず、すべての学齢ごとにクラスを作るにはそれに見合った数の教師や教材、教室を準備し、また多くの学科を提供する必要があった。ユダヤ人難民たちにとって緊急避難場所になった上海は単なる「待合室」に過ぎず、子供たちがアメリカ、カナダ、オーストラリアなど本来の最終的な移住目的地において高等教育を受けられるよう準備するためには、高い水準の教育が求められた。

6. 英語教育を重視する。

上海租界では住民の大部分が中国人であるにもかかわらず、外国人は中国語を習得せず、英語が共通語だった。ユダヤ人難民たちもこの社会で暮らして生計を立てるためには英語を学ぶことが絶対条件になった。それは大人だけでなく、子供の場合も同様であり、将来英語圏の国への移住を希望するのであればなおさらだった。英語を学ぶにとどまらず、その他の授業もドイツ語やイデッシュ語のような難民の母語でなく英語で行われた。The China Weekly Review紙のAnna Ginsbourg記者は1941年4月、上海に来て2年に満たない10歳の難民少女と話し、その英語を「申し分ない」と評価している。⁶⁾

7. 民族教育によりユダヤ人としてのアイデンティティを確立する。

上海では物価や家賃が安い蘇州河以北の日本軍警備区域東部にユダヤ人難民が集中し、いわゆるユダヤ人街が形成された。ドイツやオーストリアからの難民たちは移住する前、圧倒的多数のキリスト教徒の中で暮らし、文化的のみならず宗教的同化も進んでいた。社会的な成功を収めていた人々は自分をユダヤ人というよりもドイツ人・オーストリア人と考え、クリスマスを祝うことも珍しくなかった。一方ポーランドからの難民たちは文化的にも宗教的にもユダヤ人の伝統を強く維持していた。出身国も宗教的背景（正統派・保守派・改革派ユダヤ教およびキリスト教）も異なるユダヤ人が同じ場所で生活することにより、またユダヤ人であるがゆえに移住を余儀なくされたという事実から、民族性があらためて意識された。半生をかけて築き上げてきたものを奪われた上に、祖国を追われ、自らの帰属意識が不安定になったこともその一因である。学校ではヘブライ語と聖書が教えられた。

このような状況では珍しくないが、大人たちの間には出身国の違いによる反目も見られた。しかし大人同士の対立が子供たちの間に持ち込まれることはなかった。難民の子供たちにとって貧しい環境が互いの共通点となり、学校での集団生活を送ることで彼らの連帯意識が高められた。

小学校

1938年末以降、中部ヨーロッパからユダヤ人難民が陸続と上海に到着し始める。その中には子供連れの家族も含まれ、その子供たちは上海ユダヤ人学校（Shanghai Jewish School）に通った。⁷⁾

上海ユダヤ人学校は、アヘン戦争（1940-1942）後の南京条約（1942）で上海が開港されて以来ここに在住するイラクのバグダッド出身のユダヤ人（セファルディ系ユダヤ人）社会が1902年貧しい家庭の子弟のためにSheerith Israelシナゴグに付属して設立したヘブライ語学校から発

展した。⁸⁾ 上海の外国人社会の根無し草的世界市民主義からユダヤ人社会を守るため、伝統的なユダヤ教育を施したが⁹⁾、世俗的科目も教えられ、授業は英語で行われた。上海ユダヤ人学校には20世紀に入って上海へ移住して来たロシア系ユダヤ人の子弟も通った。1931年にはSeymour Road (西摩路、現在の陝西北路)のOhel Rachelシナゴグに隣接する広大な土地に8つの教室と図書室を備える2階建ての新しい校舎を得た。¹⁰⁾

中部ヨーロッパからユダヤ人難民が移住し始める前の1938年初め、上海ユダヤ人学校の生徒数は240人だったが、1年後の1939年初めには120人の難民子弟が加わったため満員になり、転入するのに1年も待たねばならなくなった。さらに難民の多くは学校から10km近く離れた蘇州河以北の虹口地区東部に居住したため、市街電車だと片道1時間かかり、無料バスによる送り迎えが必要という問題もあった。¹¹⁾

そのためSir Horace Kadoorieが1939年6月、市参事会から第2次上海事変(1937年)までKinchow Road (荊州路)の中国人用学校だった建物を借り受け、上海ユダヤ人青少年協会学校(Shanghai Jewish Youth Association School)を設立し、380人の子供たちを受け入れた。¹²⁾ この建物はハイムとしても用いられ¹³⁾、学校用の部分の改修が完成した1939年11月に正式に開校した。ベルリン出身の女性教師Lucie Hartwichが校長となり、14人の教師を擁した。1940年5月にここを訪れたOriental Affairs誌の記者は、538人の難民が居住するハイムの中で、580人の生徒が学ぶ学校部分には近代的な調理場、快適な読書室、多くの教室があり、快活で満ち足りた雰囲気があると報告している。¹⁴⁾

しかし第2次上海事変で虹口を離れていた中国人が戻って来たため、1941年夏には建物を明け渡さねばならなくなる。今や600人近くに達した生徒を収容するため、Kadoorieは新たにEast Yuhang Road (東有恒路、現在の东余杭路)に広々とした土地を確保し、近代的な校舎を建て、1942年1月に開校した。教師は18人に増えた。

SJYAまたはKadoorie Schoolとも呼ばれた上海ユダヤ人青少年協会学校は、ヨーロッパの制度にならい、月曜から金曜までの週5日授業、朝8時始業、午後1時終業だった。しかし多くの子供たちは午後も学校のグラウンドに留まり、スポーツやゲームや個人授業に参加した。上海ユダヤ人学校と同様にヘブライ語や聖書の他に世俗的な科目も教えられ、英語で授業が行われた。ある12歳の少年の1947年6月に終了した学期の成績表には、当該生徒の試験の平均点と学年順位、ヘブライ語・聖書・文法・作文・読み方・書き取り・暗唱・書写・フランス語・暗算・筆算・代数学・幾何学・幾何学製図・歴史・地理・美術・一般知識・スポーツ・リズム・歌唱の各科目についてその点数・学年順位・評価、さらに品行と総合所見が記載されている。¹⁵⁾ 同様に8歳の少年の1946年10月に終了した学期の成績表には、当該生徒の試験の平均点と学年順位、ヘブライ語・聖書・文法・作文・読み方・書き取り・暗唱・算数・一般知識・書写・美術・リズム運動・歌唱・体操・綴り方の各科目についてその点数・評価、さらに品行と総合所見が¹⁶⁾、10歳の少女の1948年6月に終了した学期の成績表には、当該生徒の学年順位、聖書・文法・作文・読み方・書き取り・暗唱・書写・算数・地理・美術・一般知識・リズム・歌唱・ヘブライ語の各科目についてその点数・評価、さらに品行と総合所見が記載されている。¹⁷⁾

Kadoorie Schoolは太平洋戦争中も約700人の生徒を擁した。多くのセファルディ系ユダヤ人有力者と同様Sir Horace Kadoorieも英国籍だったため、太平洋戦争開始後はその運営を難民コミュニティ組織であるJüdische Gemeindeに委譲した。¹⁸⁾

オーストリア出身のユダヤ人難民の子弟たちはヨーロッパで宗教訓練をほとんど受けていな

かった。また難民の中にいた500～600人の正統派ユダヤ教徒はKadoorie Schoolのカリキュラムに不満だった。彼らはロシア系ユダヤ人のラビMeir Ashkenazi およびMachasike Laumde Tauruh委員会とともに1939年12月Ward Road（華徳路，現在の長陽路）のOhel MoisheシナゴークにTalmud Torah学校を設立した。最初は35人の生徒だったが，1941年には約120名，1944/45年には300人の生徒がKadoorie Schoolの放課後に宗教教育を受けた。¹⁹⁾

私立の学校も作られた。ドイツ系ユダヤ人難民で教師だったIsmar Freysingerが1941年4月にFreysingerユダヤ人小・中学校（Freysinger's Jewish Elementary- and Middle School）を設立した。この学校は教師7人，生徒数100～150人でKadoorie Schoolより小規模ながら，よりユダヤ志向のカリキュラムで総計500人以上の生徒を教育した。ある9歳の少年の1943年7月に終了した学期の成績表には，当該生徒の学年順位，ヘブライ語・聖書・ユダヤ史・文法・作文・読み方・書き取り・暗唱・書写・フランス語・算数・地理・歴史・生物・図画・裁縫・リズム運動・歌唱の各科目についてその評価，さらに品行と総合所見が記載されている。²⁰⁾

幼稚園

1941年3月，セファルディ系ユダヤ人富豪Sir Victor Sassoonが在中国ヨーロッパ系移住者支援国際委員会（International Committee for European Immigrants in China / I.C.）²¹⁾を通し，494 Tongshan Road（塘山路，現在の唐山路）に「I.C.保育園と子供たちの家」を設立した。ドイツ語による難民新聞Shanghai Jewish Chronicleの記事でその様子を知ることができる。²²⁾ 園長以下，助手1名，見習い2名，料理人1名，管理人1名が2～6歳の子供40名を世話した。²³⁾ 近代的な設備の調理場を持ち，1日3食提供される。近代的な設備の救急室を備える上に，登園・帰宅時には医師が園児の健康状態をチェックする。当時上海では一般的でなかった温水のシャワー・浴室を備え，食事と帰宅の前に園児たちの体を洗った。4つの衛生的な子供用トイレも備えつけられた。開園時間が朝8時から夕方7時までのため，幼児を持つ親は安心して仕事に出ることができた。

この他にも上海ユダヤ人青少年協会学校の幼稚園や私立幼稚園，上海アシュケナージ共同救援協会（Shanghai Ashkenazi Collaborating Relief Association / SACRA）²⁴⁾の幼稚園が作られた。英語による教育は幼稚園でも行われ，園児たちにとって英語を第2の母語にするために，ドイツ語で話すことは厳しく禁じられた。²⁵⁾

注

- 1) 初期にKinchow Road (荊州路) とChaoufoong Road (兆豊路, 現在の高陽路) のハイム (難民キャンプ) に学校が設置されたが, その土地と建物は救援委員会が市参事会から賃借した。
- 2) James R. Ross: „Escape to Shanghai – A Jewish community in China“. New York (The Free Press) 1994. S. 57. Sir Horace Kadoorieより30年以上前に同様の内容をIsrael's Messenger (上海のセファルディ系ユダヤ人社会の英字紙) も述べていることから, これは上海のユダヤ人社会の共通認識だったことが窺える。上海におけるシオニストの機関紙的存在だった同紙は1909年5月14日, 上海ユダヤ人学校 (Shanghai Jewish School) の目標は「生徒たちが生計を稼げるように, そしてユダヤ人コミュニティおよび上海の名誉になるように教育すること」だと論じた。
- 3) 0~15歳の子供は親のパスポートに併記されたため, 各種資料に現れないことが多い。アメリカ合同配分委員会 (American Joint Distribution Committee) の資料によれば, 上海のユダヤ人難民のうち, 1946年に16歳以下の者は全体の10%である。David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews – The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938 - 1945“. Hoboken, New Jersey (KTAV Publishing House) 1988 (1976). S. 612 - 613.
- 4) これはヨーロッパのユダヤ人だけでなく, アジアのユダヤ人においても認められる。例えば Sir Horace Kadoorieの父Sir Elly Kadoorieがバグダッドに設立したLaura Kadoorie Schoolでは1177人の女子生徒が宗教的科目と非宗教的科目を教えられた。叔父のSir Ellis Kadoorieは1901年以来香港, 広東, 上海に中国人のための学校を設立運営した。授業は英語と中国語で行われた。Maisie J. Meyer: „From the rivers of Babylon to the Whangpoo: a century of Sephardi Jewish life in Shanghai“. Lanham (University Press of America) 2003. S. 123.
- 5) Rena Krasno: „Strangers Always – A Jewish Family in Wartime Shanghai“. Berkeley (Pacific View Press) 1992. S. 135.
- 6) Anna Ginsbourg: „Thousands of Shanghai's German-Jewish Refugees Lead Lives of Disillusionment, Despair“. The China Weekly Review. April 26, 1941, S. 252.
- 7) 1932年Ohel Rachelシナゴグのラビとしてロンドンから招聘され, 上海ユダヤ人学校の校長にも就任したMendel Brown導師 (1885 - 1949) は, Sir Horace Kadoorie と並ぶヨーロッパ系ユダヤ人難民支援委員会の教育・文化委員会のもう1人の責任者だった。
- 8) 裕福な家庭の子弟は外国人用のパブリックスクールに通った。1922年Sheerith IsraelシナゴグがSeward Road (熙華徳路, 現在の長治路) に移り, 学校は近くのDixwell Road (狄思威路, 現在の溧陽路) に移った。
- 9) Rena Krasno: „Strangers Always – A Jewish Family in Wartime Shanghai“. S. 14.
- 10) 1939年には近代的な科学実験室の導入により, カリキュラムも拡大された。Maisie Meyer: „The Sephardi Jewish Community of Shanghai and the Question of Identity“. In „From Kaifeng ... to Shanghai. Jews in China“. Ed. by Roman Malek. Nettetal (Steyler Verlag) 2000. S. 367.
- 11) I. Betty Grebenschikoff: „Once My Name Was Sara“. New Jersey (Original Seven Publishing Co.) 1993. S. 67.

- 12) James R. Ross: „Escape to Shanghai — A Jewish community in China“. S. 151. 上海ユダヤ人青少年協会学校ができた後も何人かの子供は上海ユダヤ人学校に通い続けた。1940年6月14日のIsrael's Messengerの記事によれば、上海ユダヤ人学校の生徒数は274人（男子131人、女子143人）である。
- 13) 1939年11月に上海のThe New Star出版から発行された『Emigranten Adressbuch（移住者住所録）』には5351の個人・法人が記載されているが、そのうち学校と同じ100 Kinchow Roadを住所としている者が121人いる。1939年の後半、Kinchow Roadハイムの食堂で午前中子供たちが勉強し、昼になるとハイムの内外に住む数百人の難民が食事を取った。James R. Ross: „Escape to Shanghai — A Jewish community in China“. S. 42.
- 14) „Jewish Refugees in Shanghai. A Heart-breaking Problem“. Oriental Affairs. June, 1940. S. 294.
- 15) 暗唱・書写・幾何学製図は科目名が成績表に印刷されているが、点数・学年順位・評価が記入されていないため、この学期には教えられなかったのであろう。読み方・美術・スポーツ・リズム・歌唱は評価のみ記入されている。評価を記入した17の科目には9人の教師の署名がある。Georg Armbrüster: „Kindheit in Shanghai“. In „Leben im Wartesaal. Exil in Shanghai 1938 - 1947“. Berlin (Jüdisches Museum im Stadtmuseum Berlin) 1997. S. 51.
- 16) 各科目のうち一般知識・美術・リズム運動・体操・綴り方は点数が記入されていない。ヘブライ語・聖書・文法・作文・歌唱は点数・評価とも未記入である。品行についても未記入である。評価を記入した10の科目には4人の教師の署名がある。Georg Armbrüster: „Kindheit in Shanghai“. S. 58.
- 17) 各科目のうち聖書・文法・読み方・暗唱・書写・地理・美術・一般知識・リズム・歌唱は点数が記入されていない。暗唱・地理・一般知識・歌唱は点数・評価とも未記入である。評価を記入した10の科目には5人の教師の署名がある。潘光主编「犹太人在上海」, 上海画报出版社, 1995年, 33頁。
- 18) 上海ユダヤ人学校の運営はロシア系ユダヤ人社会が引き継いだ。
- 19) Georg Armbrüster / Michael Kohlstruck / Sonja Mühlberger (Hrsg.): „Exil Shanghai 1938 - 1947. Jüdisches Leben in der Emigration“. 付属CD-ROM, 「ドイツ総領事館の資料（解説）」。
- 20) 各科目のうち聖書・ユダヤ史・フランス語・地理・歴史・生物・裁縫は評価が記入されていない。評価を記入した11の科目には学級担任ともう1人の教師の署名がある。アメリカ合衆国ホロコースト記念博物館のホームページ (<http://www.ushmm.org/>) のPhoto Archive (Photograph #30686)。
- 21) ユダヤ人難民が上海に到着し始めた1938年8月, ヨーロッパ系難民救援国際委員会 (International Committee for Granting Relief to European Refugees / I.C.) が設立された。1938年10月にできたヨーロッパ系ユダヤ人難民支援委員会 (Committee for the Assistance of European Jewish Refugees / CFA) が1939年8月, それまでI.C.が行ってきた病院と救急診療所の組織と運営を引き継いだ, 1939年12月Sir Victor Sassoonを委員長とする在中国ヨーロッパ系移住者支援国際委員会 (International Committee for European Immigrants in China / I.C.) として新たなI.C.が誕生した。
- 22) Ernst Pollak: „Das Haus des Kindes“. Shanghai Jewish Chronicle. 27. April 1941.
- 23) I.C.設立3周年に当たる1941年8月7日に実務上の責任者であるPaul Komorに贈られたI.C.職員のアльバムには幼稚園の職員の制服を着た男性1人, 女性8人が写っている。4月27日付けの

- 新聞記事よりも職員が増えていることから、子供を預けて働きたい親が多かったことが窺える。アメリカ合衆国ホロコースト記念博物館のホームページ (<http://www.ushmm.org/>) の Photo Archive (Photograph #94716)。
- 24) 1943年2月18日のゲットー設置の布告により指定された地域以外に住むユダヤ人難民の移住を、布告の対象にならなかったロシア系ユダヤ人によって監督・促進させるため、上海無国籍避難民処理事務所の久保田所長が命じて設立させたもの。
- 25) Astrid Freyeisen: „Shanghai und die Politik des Dritten Reiches“. Würzburg (Königshausen & Neumann) 2000. S. 414.

参考文献

- „Jewish Refugees in Shanghai. A Heart-breaking Problem“. *Oriental Affairs*. June, 1940.
- Ernst Pollak: „Das Haus des Kindes“. *Shanghai Jewish Chronicle*. 27. April 1941.
- Anna Ginsbourg: „Thousands of Shanghai's German-Jewish Refugees Lead Lives of Disillusionment, Despair“. *The China Weekly Review*. April 26, 1941.
- David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews — The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938 - 1945“. Hoboken, New Jersey (KTAV Publishing House) 1988 (1976).
- Rena Krasno: „Strangers Always — A Jewish Family in Wartime Shanghai“. Berkeley (Pacific View Press) 1992.
- I. Betty Grebenshikoff: „Once My Name Was Sara“. New Jersey (Original Seven Publishing Co.) 1993.
- James R. Ross: „Escape to Shanghai — A Jewish community in China“. New York (The Free Press) 1994.
- Georg Armbrüster: „Kindheit in Shanghai“. In „Leben im Wartesaal. Exil in Shanghai 1938 - 1947“. Berlin (Jüdisches Museum im Stadtmuseum Berlin) 1997.
- Astrid Freyeisen: „Shanghai und die Politik des Dritten Reiches“. Würzburg (Königshausen & Neumann) 2000.
- Maisie Meyer: „The Sephardi Jewish Community of Shanghai and the Question of Identity“. In „From Kaifeng ... to Shanghai. Jews in China“. Ed. by Roman Malek. Nettetal (Steyler Verlag) 2000.
- Georg Armbrüster / Michael Kohlstruck / Sonja Mühlberger (Hrsg.): „Exil Shanghai 1938 - 1947. Jüdisches Leben in der Emigration“. Teetz (HENTRICH & HENTRICH) 2000.
- Maisie J. Meyer: „From the rivers of Babylon to the Whangpoo: a century of Sephardi Jewish life in Shanghai“. Lanham (University Press of America) 2003.

Die schulische Erziehung der jüdischen Flüchtlingskinder in Shanghai

Yoshio ABE

Während des Zweiten Weltkriegs lebten in Shanghai ca. 18.000 jüdische Flüchtlinge aus verschiedenen europäischen Ländern wie Deutschland, Österreich, Polen und der Tschechoslowakei u.dgl., die vor der nationalsozialistischen Unterdrückung geflohen waren.

Die schulische Erziehung, die die jüdische Flüchtlingsgemeinde für die Kinder unter 13 Jahren organisierte, war durch die folgenden Punkte gekennzeichnet:

- 1) Die Schulen wurden von den Juden Shanghais selbständig gegründet und verwaltet.
- 2) Innerhalb der jüdischen Gemeinde war der Anteil der Kinder insgesamt sehr klein.
- 3) Der Anteil der Kinder aber, die diese Schulen besuchten, war hoch, da die Eltern großen Wert auf die schulische Ausbildung legten.
- 4) Die Kinder lebten in einem relativ sicheren Milieu, frei von Krieg und Verfolgung.
- 5) Für jede Altersstufe waren unterschiedliche Erziehungsinhalte nötig.
- 6) Da in den Shanghai-Konzessionen Englisch die Lingua franca war, legte man auf Englischkenntnisse großen Wert.
- 7) Zur Festigung der jüdischen Identität, wurden auch Hebräisch, das Alte Testament und die Geschichte der Juden unterrichtet.